

## 大通和座通信

## YAMATOZA

## 日々新面目

## 其の十四

安東伸元

「芸術はアバンギャルドであるべきである」という言葉を十代の終わりに何かで読んで、以降この思想がわたしの念頭を離れないでいます。この前衛思想が主流を占めていた時代の真っ直中に成年期を過ごしたせいであるかもしれませんが。既成の価値観を壊す意味でフランス語を源にするアバンギャルド（前衛）が存在するわけですが、ここで言う破壊は人間の、ひいては社会の前進のために自然発生的に生まれた思想行動と、私は理解してきました。しかし二十世紀に到った現代市民国家では、この言葉は死語に近くなつてしまっているようです。殊に先進国と言われる都市国家にあつては、物資の豊かさに導かれた思想の退廃から芸術の前衛思想は飾り物になっていて、前衛を売り物にするものは単に奇を衒つたものか、先進を装うために訳

の分からぬ屁理屈を並べたに過ぎないものに見えます。前衛書道・生け花・絵画・彫刻、果ては建築と数え上げればきりがありませんが、それらのどれにも私は舌打ちしたいほどの辟易を感じます。芸術はアバンギャルドであらねばならないという視点で、これまで私は花鳥風月に心が動かない、故実来歴にさしたる意味が感じられない、既存の慣習や因習に価値を覚えないという思想をいつも頭の隅に巣くわせて生きて来たように思います。それらのいずれもが取つて付けたような妙に押しつけがましい様子に感じられたからです。ところで古希を迎えた今、これまで乱暴に扱ってきたこれら諸々の事柄に深い愛着を覚えていきます。国家と民族の成り立ちを深く探り、己を知るために故事古典の正体と端座して立ち向かわねばと思つていきます。手あかに汚れた正に絵に描いたような「花鳥風月」は御免蒙りますが、これを生み出した民族の文化思想は是非ともわが身に取り込まねばならぬと思つていきます。これまでたびたび古典芸能を「絵に描いた餅」と言及してきました。我が国の文化行政の正体はこの食えぬ餅を与えて栄養を摂れと言つてきたに過ぎない事がようやく衆人の感じ出すところになつてきたようにも思います。異常といえる程の西欧文化への追従、その摂取紹介に費やす異様な程の熱心さによって、われ

われは西欧産の餅をひたすら食わされ続けてきたわけです。この餅はいかにも芸術の香りを漂わせて日常の食卓に供せられ、大衆は驚喜緊張恐縮して摂取に努めてきたわけです。一方自国の古典伝統文化は床の間を飾るお宝としていたずらに一部の人間の虚しい特権的安心感を満たすものになつていません。つまり戦後の民主主義思想が切り捨て衰退に追いやつた民族主義思想と連なつて、妖しい・胡散臭い・現代的でないというマイナスのイメージにまぶされて今日まで生きてきたわけです。週末の新聞に掲載されるおびただしい催し物案内広告を見て相変わらず呆れています。欧州各国の音楽家、交響楽団、バレエ、オペラの来日公演の宣伝をみていますと、かつて西洋クラシック音楽の或る有識者から聞いた話が思い出されます。「日本は音楽興業の最大の市場になつていて、中には小遣い稼ぎに来るような連中もいる」料金は何れも高額、知名度の高い者たちは驚く程の報酬を得て帰るのでしよう。私はにわかはこの指摘を信じたくはありませんが、わが国の現状から見て、音楽芸術に親しみ人格を高めている人間がそれほど育まれているとは思えず、なるほどなめられているのかも知れぬと思わされます。同じ紙面を飾る演劇は、どれもこれも大仕掛けの豪華な見せ物を競つもので制作費がかさむのか、これ

も庶民感覚を嘲笑うが如き高額な入場料金を提示しています。興業の意図は、豪華絢爛な仕掛けによって観客をただ驚かせ喜ばせ楽しませるものであるように思われます。このような悪口を吐くのなら、せめてその現場をつぶさに見た上で・・・と言われそうですが、確かに近頃私はこの種の商業演劇を見ていません。理由はかつて幾つかを見た経験から推し量って、見た後の空疎な腹立たしさがたまらないので出掛ける気が一向に起こらないのです。宣伝のどの文言も私の心を刺し貫かないのです。大衆を慰撫するための娯楽的エンターテイメントは必要ですが、所詮それに過ぎないものに芸術の仮装をさせて、それが宣伝通り少なからぬ大衆を動員する様相に癒しようのないやりきれなさを覚えます。見えてくるのは経済理優先の興業姿勢です。演劇のアバンギャルド精神は歴史的に考えても、演劇が舞台芸術であるためにその屋台を支えるべき柱の一本であるはずで、現在の様相は、そのような意味を受け付けなければかりか理解さえしない大衆を大量に生み出すだけのものに見えます。四月の初め舞台美術家の板坂晋治先生から案内を受けて芝居を観に出かけました。ボクとアナタの会主催、井上ひさし作、森本景文演出の「父と暮らせば」、出演ノ木田昌秀・岡部紀子、制作スタッフは板坂先生の呼びかけで参集した

読売テレビOBを中心にした四〇人という骨のある見事な芝居でした。会場はパイプ椅子を並べて五〇席で満杯の「劇団未来ワークスタジオ」、私は二〇〇二年に出かけて観たチエコの芝居を思い出しました。塔のような建物の石段を下りた地下に膝つきあわせて百人も入らない空間があり、そこで正に手作りの演劇が展開される。芝居が終わって隣の小さなレストランで食事をしていると、つい先程熱演していた女優が見事に素に戻って手を振りながら帰って行く、それと同じような空気を感じました。いずれも欲得なく演劇をわが身の芯に注入した人間の誠意と情熱が伝わってきて爽やかな感動を覚えるのです。帰路雨に見舞われタクシーに乗ったところ、不思議な出来事が起こりました。車中の会話の中で、問われるままに観劇の帰りと答えると、六〇才前後と思われる運転手さんから意外な意見が返ってきました。話はNHKの大河ドラマへの批判です。運転手さんは言います。「世の中には演劇に命を掛けて生きている人間がいるのにNHKはどうしてそんな役者を使わない、有名で人気があるからと言っただけで演技力のない人間を使うから中身が薄っぺらくて面白くない、この番組が始まった頃は録画をしてまで楽しんでいたが前々回辺りから見る気も起こらない・・・」正にこもつともな意見です。この方はかつ

て演劇青年であったのかも知れません。細部に亘る説明もしつかり筋が通っていて分析の確かさに感心しました。久しぶりに佳い芝居を堪能した夜にこの様な人の運転するタクシーに乗り合わせた事を不思議と感じたわけです。京都の高名な寺で、今話題の梨園名家親子による歌舞伎を興行するという話があります。名刹の古寺で歌舞伎をとという組合せに私は不審を感じます。今の世の中、このような奇を衒ったとしか言いようのない企てで話題を作り、人集めをねらう興業屋が沢山いるのでしよう。またその企てに簡単に乗ってしまう寺も廠の存在であるべき歴史的寺院として情けない限りです。歌舞伎を誹謗して言っているのはありません。わざわざ組み合わせる事に必然性を感じないから私は奇を衒うと申しているわけで、この組合せは節操のない野合と映ります。根幹を貫く思想や理念の衰退がさまざまな処で野合の産物を生んでいくようです。この産物を見る度、私のような人間は「くだらない」の捨てセリフを吐いています。広辞苑による「野合」の語意は、男女が婚儀を経ずに通ずること。密かに結びつくこと、とあります。

(四月五日)



安東伸元（あんどつ のぶもと）

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二年、重要無形文化財（能楽）保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

## 「松風」その二

### もろきゆう

三月下旬、国立国際美術館の「中国国宝展」を覗いてきた。紀元前三千五百年の玉（ぎよく）の数々に度肝を抜かれた。今から五千年以上も前の遺産に時間の重みを感じたひとときだった。この「中国国宝展」

では新石器時代から始まり、商時代（紀元前千三百年）、西周時代（紀元前八百年）、秦時代（紀元前三百年）、漢時代（紀元前二百年）と展示品を年代順に並べていた。古い美術品の美しさというより、人類が文明を築いて五千年もの時間が経過していることとの不思議さに感慨を覚えた。

地球の年齢は四十六億年、そして二〇〇三年二月、NASAの「WMAP」衛星の観測データに基づいて「宇宙の年齢は百三十七億年プラスマイナス二億年」と発表された。宇宙の視点で見ると五千年の人間の歴史というのはまばたきするほどのわずかな時間だ。だから宇宙のなかでは人類の存在などはほんの一瞬間といえる。その一瞬の間に私たち人類は様々な文明を築き、繁栄し、人口を増やし、戦争を起こし、科学を発達させ、地球を汚染し、果ては科学技術で地球を滅ぼすかもしれない存在となった。星に知的生命体が出現すれば、それが

星を滅ぼすのも自然の成り行きだとする説もある。たとえそうでなくとも一京億年後には陽子崩壊が起こってあらゆる物質は消えてしまい電子と陽子とニュートリノと光しかなくなる。物理学者のフリーマンダイソンは述べている。そのように考えると私たち人間は何のためにこの宇宙に存在するのだろうか。また私たちの文化は何の役に立っているのだろうか。

国際美術館からの帰り道そんなとりとめもないことを考えながら、見上げると満天の星空だった。星空を見上げながらその星が何万光年も彼方に存在していることや、今見ている光が何万年も昔のものだということ。想像しているとその星の光がますます美しく感じられた。科学技術が発達し、宇宙について様々なことが解明されつつある。また、ナノテクノロジーによって十億分の一メートルの世界も見えるようになってきた。さらには遺伝子情報を解析して遺伝子进行操作したり、クローン技術によって病気の治療をすることができるようになってきた。私たち人類は科学技術によって様々な困難を克服してきた。また様々な謎や不思議なことを解明してきた。

さらに科学技術によっていかようにも自然を改変させる力をもってきたということだ。それでもまだまだ、人知の及ばない世界は無限に広がっていると見えよう。その

謎の世界が私たちにさまざまな想像を生み出させるのだ。そして私たち人間は想像力を働かせることによって心を動かされるのである。

ところで、三月三十一日の毎日新聞の朝刊に次のような文章が載っていた。ある日、目の不自由な女子高生が地下鉄の駅のホームから転落した。駅員が気づいたのでかすり傷だけで助かった。記者は病院の待合室で娘さんを見かけた。「両親らしき中年の夫婦がやって来て、娘さんとひとしきり言葉を交わした。その後、二人は娘さんを問には喜んで座ると、下を向いたまま黙り込んでしまった。気配でそれを察した娘さんも、黙ってうつむいた。三人は長いすの上で肩を寄せ合うようにして、いつまでも彫像のように動かなかった。」両親は娘の無事を確認したのち、目が不自由なゆえに事故に遭わねばならない身の上を、不憫に思ったのだらう。記者はその様子を見て「これほど美しい光景を見たことがないと思った。」と記している。もちろん事故の被害者の様子を「美しい」などと記事に書けなかつたそうだが、記者は「悲しくて美しい」光景があつてもよいではないかと主張しているのだ。この記事を読んだ人は、うつむいたまま座る家族の姿に様々な思いを致すだらう。「彼女はうつむいてこんな運命を背負つたのか」「この家族はこれからどのように

生きるのか」など私たちは様々な想像をずる。だからその美しくてかなしい光景が私たちの胸を打つ。「美しくてかなしい」という感性はまさに想像力を必要とする文学の世界にある感性といえよう。

さて、王朝文学に材をとつた能「松風」をみると、このことに相通ずる感性を窺うことができる。もう一度この話の梗概を簡単に触れてみると次の通り。「平安時代、松風、村雨という二人の女性が幽霊となつて須磨浦の塩屋に現れる。二人の幽霊はかつて在原行平に寵愛されたことを語る。ことに、松風の霊は恋慕の情が募り、行平の形見の烏帽子と狩衣を着け舞を舞い、妄執の苦しみを述べて僧に回向を乞う。女性が男性を恋慕うあまりに、幽霊となつても成就せぬ恋に囚われる。」という話である。まず海土（あま）と、皇族の血を引く男という身分の差を超えての恋愛であり、男は二人の女性を残して都へ帰つてしまう。二人の女性は海土という職業には似合わぬ情趣を解する人たちであつた。そして女性達の執心が残り、死後何年もたつて幽霊となつて修行僧の前に現れる。これらの条件すべてが観客に想像力を働かせる。そしてその話にあわれを感じたり、不思議を感じたりして心を動かされる。その中に「悲しくて美しい」という感動もあるかもしれない。

情報技術が発達して、私たちは様々な美

しいものを見たり聞いたり、体験したりできるようになった。テレビやインターネット、DVD、ビデオなどさまざまなメディアで日常では見ることができないものを、お茶の間で見ることが出来る。都会や遊園地に行けばきらびやかなネオンや飾りを見ることが出来る。

またネットゲームでアニメの女性に恋をしてしまふ人もいれば、ネットで見合いや結婚をする人もいる。人を美しいと感じる基準も価値観も多様化してきた。このような情報社会に生きる現代人の想像力は知らず知らずのうちにやせ細ってきている。そんな時代だからこそ、デジタルな映像よりも写真、写真よりも絵画、絵画よりも実物のほうが、不思議な魅力があり想像力をたくましくさせ、美しいと感じさせるのではないだらうか。

了

#### 参考文献

佐藤勝彦編 『宇宙はこうして誕生した』  
ウェッジ選書



山田 師久(やまだ もろひさ)  
大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術プレーン。月例「輪讀会」の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

## 科学の進歩と芸能のあり方 〜天満天神繁昌亭に思う〜

森五六九(もりごろう)

来春、大阪天満宮の境内に落語の定席「天満天神繁昌亭」が完成する。我々上方落語協会々員はその建設資金を得るため、今市民からの寄付金を募っている。東京のそれと決定的に違うのは、東京は席亭というオーナーが別にいるのだが、大阪は協会自身が席亭になる。つまり個人所有や国立の寄席ではないということだ。オーナーがポンと金を出して寄席を作るのではなく多くの市民から寄付金を寄せる。大阪城が市民の寄付で再建されたのと同じ発想だ。そして我々演じ手は「伝統芸能、文化はみんなの財産である」ということを忘れてはならない。建物自体もほったて小屋のようなものならそう費用もかからないだろうが、どうしても外装内装ともにこだわっている。ちよつとひと昔前落語が一番華やかだった頃のちよつとレトロな雰囲気はどうしてもいるのである。でないとい今回の試みは全く無駄になってしまうかも知れない。能狂言に能楽堂があるように、落語にも伝統的な匂いのする空間がやはり必要なのである。

ところで、最近落語会へのお客の中に「インターネットで知りました」という方

が確実に増えている。今世の中はインターネットだデジタルだとどんどん進歩しつつ、そのテンポはこのところやけに加速がついてきた。今や「普及率は高くなった」と書くのが恥ずかしいくらいパソコンの存在が当たり前の今日。聞けば同じ社内でも互いが同じフロアで仕事しているにも関わらず、メールのやり取りだけで用事を済ますことが少なくないらしい。私への出演依頼も然り。現代人に求められているのはいかに効率よく仕事をこなすかということらしい。スピード時代。時は金なり。ちなみにこの原稿もパソコンに向かって書いている(打っている)。しかし、このような現代にあつて最近巷でよく耳にするのが「スロライフ」なる言葉。こうした現代社会においてゆっくりとマイペースに過ごそうという動きである。賑やかさよりくつろげるゆつたりとした生活を求めようという人が確実に増えている。世の中の流れは面白い。ある大きなうねりがあると、必ず全く逆の動きがまるで対のように発生する。そう思うと、ホリエモンなる人物が出てきてインターネット、デジタル云々言ってるそのほぼ同時期、マイナーではあるが落語の定席建設というのは宿命すら感じてしまつ。間違いなく落語は「スロライフ」の文化である。もちろん「狂言」然り。師匠の安東は「室町の匂い」にこだわり続けてきた。

せわしい世の中だからこそ「スロー文化」が求められている。インターネット、デジタル化の現代が古典芸能を求める。私は最近落語会の活動を通して、何となく静かに「落語ブーム」の兆しを感じている。世間が社会に疲れた時こそ「おいで」と言える寄席でありたいと思う。

ところで、私は今「ECC落語教室」というところの講師をやらせてもらっている。年令は二十代から六〇代、勤め帰りのサラリーマンやOL、自営業の人まで。「落語」を学ぼうという動機もバラバラだが「落語」が好きという価値観は当然同じである。「人前であがらず喋られるようになった」とか「営業成績があがった」とか「最近明るい人から言われるようになった」とかそういう声を聞くと我ながら嬉しいものだ。落語家になるわけではないので、「落語」の上手い下手、ウケタかウケナイよりも「落語」がその人の生活にどれだけよい結果、影響をもたらせてくれたかの方が私にとつての関心事である。私は全然偉くないが「落語」というものは凄いのである。その講座でこんな事をよく口にする。「『アホやな』の台詞は『しゃあないやつちやなあ。けど憎めんやつちやなあ』という気持ち桂春蝶からの受け売り。確かにそういう気持ち持ちはハラにないと同じ咄でも実にトゲト

ゲしい。前にこういうことがあった。一人の受講生（二十歳すぎのOL）が船場の商家を舞台にした咄に取り組んでいた。いわゆる「丁稚もの」である。お世辞にも上手いとは言えなかったが、彼女の描く人物は皆とてもほんわかしていて実に魅力的なのである。旦那さんが丁稚を叱りつつも、そこには人間の信頼関係が感じられ台詞ひとつひとつが見事に暖かい。彼女の人間性がそのまんま投影されているのだ。この辺に「芸」の素晴らしさがある。イコール怖さだ。つまり「了見」が悪いと全部「芸」に現れる。「了見」の悪い私は、これまで自分の恥部を高座でさらし続けてきたことになる。いや明日も又さらしに行く。ああ恥ずかしい。そう言えば東京の柳家小さん師匠の口癖は「了見の悪い奴は落語家になるな」だった。「古典伝統芸能の意義は人間形成にある」は師匠安東の主張であり、我々大和座塾生が目指すところである。さて、彼女の落語を聞いた私は「船場の商家の旦那さんと丁稚の関係はええもんやなあ」と心底そう思い、ある日稽古場でこの話を安東にした。「先生、実はこのあいだこんな落語を聞きまして、船場の旦那さんと丁稚の関係はええもんやあと思えました。昔の雇用関係はよかったですな。」すると先生のおっしゃるには「蝶六君、それは落語の中の世界であって現実の商家とは少し違っ

と思うよ。」あ！そうか。それは至極当然である。私は思った。現実をリアルに描くのもいいが「ちよつとした現実離れ」だからこそのいい場合もある。癒しである。「ノスタルジー」。ここに落語のみならず古典芸能の方法があると思った。桂米朝師匠は著書の中で確かこんなことを書いておられた。「落語の登場人物には悪人がいない。泥棒ですら、ちよつと間抜けでおつちよちよいで憎めない愛すべき人物に描かれている。」

「天満天神繁昌亭」はひと昔前落語が一番華やかだった頃、戦前のちよつとレトロ口な空間、伝統的な匂いにこだわっている。そのハードに合うソフトのキーワードのひとつが「ノスタルジー」であることに違いない。せわしいせちがらい今日という時代が「ノスタルジー」を「伝統芸能」を「スローライフ」な芸能を求めている。但し、それはテレビの技術がどれだけ進化しようが家にいながらというわけにはいかない。残念ながら場の空気や匂いを届けられるまでに科学は進歩していない。これらの芸能だけはわざわざ会場まで足を運ばねば本当には味わえないというところが現代科



森五六九（もり ごろく）

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言  
 方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大  
 阪スクールオブミュージック専門学校、大阪  
 シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCアー  
 チストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷  
 高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ  
 「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ま  
 しい芸能人の在り方を模索中。

## 「古典の価値は一定か」

井上放雲

古典の価値は一つではない。案外多くの人達はその事を無自覚のまま古典に接している気がする。原因は学校教育だ。例えば音楽の授業で何かしらのクラシック音楽を鑑賞する場合、必ずその曲にまつわるウンチクを並べ上げ、そう有らねばならないと云う様な価値観を強要した上で聴き始める事が多い。「さあ皆さん、今からフランスの作曲家サン＝サーンスが作曲した、『白鳥』という作品を聴いてみましょう。チェロの暖かみのある音色と美しい旋律、そして分散和音の形でニユアンスを少しずつ変化させて微妙な味わいを醸し出すピアノの伴奏に注目して、白鳥が湖の水面でわずかに波を残しながら優雅に泳いでいるさまを思い浮かべてみて下さい。……実際

そんな説明をしている先生がいるかどうかは知らないが、多かれ少なかれそれらしい解説を二言三言加えて鑑賞するのがよくあるパターンと言えよう。かく言う自分も、そんな説明をしてから演奏を聴いていたのだ。鑑賞のオーソドックスなスタイルであり、真面目な鑑賞者の求めるスタイルであるとも言える。鑑賞者は教わった内容を、演奏

を通じて「確認」する事になる。言い換えれば「答え合わせ」だ。その結果、感覚的に確認出来た気になった人は、「まあ、『白鳥』ってとっても優雅。わたしの気分も優雅だわ。ラララー」となるだろうし、どうしても『あひる』の姿しか思い浮かばなかった人は、「ふんっ、クラシックなんてわかんないぜ！」とひねくれてしまう事もあり得よう。では『白鳥』を聴いて『あひる』を想像してしまっただけではないのだろうか。

かつて指揮者のレナード・バーンスタインは、子供向けの音楽会であるヤングゲイブルズ・コンサートシリーズの中で、面白い実験をしている。それは、例えばロッシーニの『ウィリアムテル序曲』をカウボーイの音楽だ、と説明するなど、全くでたらの曲目解説をした上で演奏を聴かせてみたのだ。軽快なリズムかつ重厚なサウンドの生のオーケストラ音楽にノリノリの子供達。後で感想を尋ねると、子供達は解説の通りに感じた、と答えている。そこでまず彼は、本来はカウボーイの音楽ではなくて、14世紀スイスのオーストリアによる圧政から自由を獲得する物語の序曲である事を伝える。しかし面白いのはその後で、彼は年端もゆかぬ子供達に臆することなく音楽の本質について演説をする。「音楽の本質とは、言葉で説明された事ではなく、今皆

さんの心の中で生じたドキドキしたりワクワクしたりノリノリになった、その心の動きそのものである」と。(筆者註・随分昔に見たビデオなので内容や発言は、かなりうる覚え。もしかしたら私の脳内で多少脚色しているかもしれない。)

そう、注目すべきは自身の心の動きそのものなのだ。面白い事に、人間誰しも心というものは一定とは限らない。同じクラシック音楽を聴いていつでも同じように心が動くとは限らない。同じ狂言を観て、面白いと思うところがいつも同じとは限らない。心の動き方には初心者から上級者まで、様々ある。しかし、古典の古典たる所以は、聴く度・観る度に何かしらの発見を与えてくれる力を持った作品が古典として残っている事だろう。古典は価値の宝箱の様なものだ。鍵は聴く側・観る側の好奇心。「答え合わせ」をするつもりではなくて、「宝探し」をするような気持ちで、何度も何度も接していると、少しずつ、あるいはある日突然、とてつもない宝を発見することがある。繰り返し接する事で、自分のレベルが変わっていく事を実感する事もある。例えば、買ってきたCDを、最初聴いた時には余りピンと来ないなあと思っていたのが、何度も聴くうちに段々面白くなっていくなどよくある事だ。私の場合、比較的難しいとされる交響曲やオペラのCDなどでそう

いう経験をすることが多い。CDの場合、中身に含まれるデータは一切変化も成長もしていないのに、繰り返し聴き込む中で、私にとっての作品の価値が変化していくのだ。『フィガロの結婚』なんて何が面白いんだろう、と若かりし頃初めて聴いた時には思っていたけれど、今では少々ひどい指揮者の時でも必ず涙が出そうになる場面すらある。

古典は、時代を超えた人間の普遍的な価値観に対する試金石。自分の中の変化に注目し、それを味わったり気長に待ったりしながら、長い目で接し続ける事が大切である。

と、今回は客席で観る側の立場における古典との接し方について考えてみたが、舞台上立つ側の立場としては悠長な事は言っていられない。次回以降、「古典の学び方」「メソッド」という視点で、古典を考察してみたい。

(二 五・四・一)



井上 放雲(いのうえ ほううん)

兵庫県生まれ。本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業、ポーランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ『アンサンブル「ベンジェ・ドブジェ」』の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。小田・金久君をはじめ学生達にとっては最適の相談役。相愛大学と大阪芸術大学で非常勤演奏要員を勤める。

# 人生を賭けて探求する

小田兆紀

最近自分自身の事を考える時間が多くなってきました。それはどの様な事かといいますが、「自分が何故舞台に関わっているのか、その目的は」という事です。最近の座内での話でしきりにあがるのが、「西洋の人間は自分が何者であるかをしっかりと認識した上で舞台に立ち、何かメッセージを伝えようとしている。対して日本人はどうか？自身のアイデンティティすら確立できず民族意識も無く、ただの自己満足で舞台に携わる若い役者が増えた」という事です。いわゆる若くは確かに民族意識や何故芸術に携わるのか、そして何故それであればならないのか。その意識に欠けている若い役者が多いと思います。以前ある場所でこんな話が出ました。ある人がその人に「あなたは何故舞台をしているのか」と問いました。その人の答えは「自分が舞台に関わる事でその舞台を見てもらってお客さんに笑ってもらったり何か反応をもらって、それが嬉しい。だから続けている」とそれに対するその人の答えは「それは自己満足である」というものでした。当時私はそのやり取りを聞いていて、それをとってしまったら何が残るのだろう、と疑問に思いました。お

芝居というものは究極的に突き詰めたら所詮自己満足の域を出る事は出来ないのではないか。しかしそれは本当にそうなのでしょか？ただの自己満足つまり個人のエゴだけで長年続けていけるものなのでしょうか。そうではないはず。そして何より、他者を納得させるだけの理由がなければやっていけないのだらうか、そうしないから自己満足というもつとも本意な言葉で終わらされてしまうのではないか？最近自問自答します。私は舞台活動を通じて幸いにも狂言という芸術に出会えました。始めた動機は単純なものでただ面白そうだからやってみたい、というものでした。そこには自国の古典芸能を傳承し後の世に繋げる、などという絵に描いたような大義名分があつたわけではありません。ただただそれを体に入りたい、というものでした。ただの憧れや目立ちたい、大きな声を皆の前で出したい等人それぞれ様々動機は有るでしょうが、そのまま良いはずは無いつかはきちんとかえなければならぬ時が来ます。その大事な所を考えずに先送りにするから今の役者は駄目なのではないか。何より、伝えたい明確なメッセージが無いから心打たないのではないかと考えます。先日観た舞台上で、それらの問題の答えに繋がるようなヒントを得ました。

その舞台は上手下手の次元を超えた、本

当に明確なメッセージ、そしてテーマを持つた舞台でした。それは台本はいうに及ばず役者自体も我々に、ひいては社会に何かを伝えたいという気概を持った舞台でした。そして何より根底で「私は舞台が好きなんだ！」という気持ちで溢れていました。以前イラン公演に行った時見た当地の役者達の目の輝きと全く同じでした。本来辛い筈の役者という職業をやっている何故目が輝いていられるか、それは偏にその仕事に誇りを持っていて、何より好きだという想いがあるからでしょう。そう考えて関わっている人間とそうでない人間とでは舞台上でメッセージ性という点やあらゆる場合において差が出るのは当然です。人生を突っ込んだ役者とはいかなるものか、その魂を見せてもらい勇気をもらって帰路に着いたのでした。何より観終わった後、とても爽やかな気分になりました。これこそが舞台の持つ力、民衆に明日への活力や何か問題定義をする、というものではないでしょうか。ただ観客を湧かせるだけでなく、何かを自宅に持ち帰ってもらって。そうしないと舞台をする意味が無い。要はメッセージ性の有無が重要ではないのか。しかし、結局堂々巡りに陥ってしまいます。それすらも結局は自己満足という一言で終わらされてしまふのではないかと。

正直ここまで書いても答えは出てきません。否、答えを早急に求めるからこんな堂々巡りに陥るのではないか、一体誰がこの問題に答えをくれるのでしょうか。これは私自身でみつけないければ意味のない事だと思います。0からのスタート。自分には何も無いと認識した上でそれらを取り入れる為に日々修練する。自分に何か有ると思う事自体がそもそも間違いでであると最近思うようにしています。自分には何か有るという意識が色々邪魔をします。ですから早急にその意識の改革をしなければなりません。いつまでも若さの情熱だけでやっていけるものではないという事はよく分かっています。そういう次元はそろそろ卒業して次のステップに進まなければならぬ所に来たのだと考えています。何故自分が舞台に関わり続けるのか、伝えたいメッセージの内容は。これはきつと一生かけて探求していく問題だと私は思っています。昨日今日はじめた私がそんなに早く答えが出せる訳は無い、しかし関わる以上はずっと考えていかなければいけない。アイデンティティや民族意識の薄い、そして日本の古典が入っていない若い世代といわれる私は、実に脆い基盤に立っている事をよく認識した上でこれからどうしたいかを考えていかなければならないと思います。

- 終 -



小田 兆紀(おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二 三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二 三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

## 「カフェエラテ」

金久蒼汲

コラボレーションという言葉を目にするようになり、もう随分経ちます。舞台を始めとする芸術や音楽、ファッションやエンターテイメント、果ては家電やグルメに至るまで、今では実に様々な分野でこの言葉が使われています。ではこのコラボレーションとはどういう意味なのでしょう。辞書を引くと「共同研究」「合作」「利敵協力する行為」とあります。字面だけを見ると分野の同異を問わず、複数の人物または手法を用いることで、より多くの利益を得ることを目的とした作品または行為と採ることができます。複数のものを組み合わせること自体にはそれほど制約も無く、また横文字好きな現代日本人の目新しさも手伝っての昨今の頻用であろうと思われる。しかし中にはこの制約の曖昧さ故に、一時の目新しさを武器に製品売上向上の為、顧客動員数増加の為などの売名行為のみを目的とし、出来上がったものには何の魅力も感じられないといったものも少なくないようです。勿論多くの支持を得れば、それによって企業や製作者の利益が上がるのですから、売名行為自体が悪いというわけではありません。せめて出来上がった作品には、複数

のものを組み合わせることで生まれる魅力や明確なメッセージ性を持っていて欲しいと思うのです。またその思いは人の感性に委ねられる舞台芸術分野においては尚更です。では何故魅力の無い結果になってしまっただけか。その原因の一つには組み合わせ方が挙げられるのではないのでしょうか。奇抜さを売りに異分野のものを同じ舞台上にただ載せただけでは、コップの中の水と油の関係のように互いに分離してしまいます。

例えばおかしいですが、理想はカフェエラテであつて欲しいと思います。しかも淹れたて新鮮で、絶妙のバランスでブレンドされ、どこを飲んでもエスプレッソとミルクの両方の濃厚な味がしっかりと楽しめる、後味すっきり美味しいものに限りません。

ながい飢餓に苦しむ夫婦、おもんと次郎作は、ついに「人買い」におもんを売るしなくなつて嘆き悲しんでいる。そこに都からやつてきた「人買い」の太郎兵衛。涙もろい太郎兵衛は、夫婦の愛に打たれては小判をはずみ、自分の死んだ女房を思い出しては小判をはずんでしまふ。調子にのつて小判を振舞う太郎兵衛をみて、おもんは一発逆転の一手を思いつくが・・・。

これは間宮芳生作曲、若林一郎台本による和製オペラ「昔噺 人買太郎兵衛」のあらすじです。決して批判ではなく、昔あつた「人買い」という文化と、その中で生き

た人達を描いた作品です。演者は三名。物語は台詞と歌で進行し、ピアノと打楽器が必要最低限の伴奏と登場人物の心の抑揚を奏でます。先日秋篠音楽堂と宝塚バガホールにて上演され、大和座も裏方で参加し貴重な体験をさせていただきましたので、ご報告致します。この公演は現在、大阪音楽大学、同志社女子大学、神戸山手短期大学各非常勤講師、神戸市混声合唱団コンサートマスターを務められる青木耕平氏が企画され、今回の太郎兵衛役としても芯のあるバリトンを聴かせてくださいました。この作品はこれまで様々な演出で上演されてきましたが、今回はもつと演劇的にメッセージを持ち、歌も台詞も日本語を大事に聴かせたいという思いから、台詞劇である狂言の手法を取り入れての上演となりました。

また青木氏が京都市立芸術大学大学院音楽研究科在学中の授業において安東先生の薫陶を受けたこともあり、その縁あつてこの度演出を安東先生が手掛けることになったのだそうです。演出方法としては、狂言の舞台と同じく三間四方の何も無い空間で、あるのは背景の松屏風と舞台上手に置かれた妙なオブジェのみ。残りの情景は観客の想像力に委ねられます。言い回しも台本の調子を崩さない程度に狂言台詞の間合いを意識し、動きにも所々に狂言所作の応用やエッセンスが感じられました。狂言の所作

は明確に動かねばならない演技に深いメッセージを持たせることができます。またその前後の無駄な動きを抑制することで、より一層の説得力を得ることができます。そしてその明確さは動きだけでなく、それに伴う言葉の明確さにも影響し、結果的に台詞の一つ一つを際立たせてくれます。動かぬことを表現の武器にした日本の能狂言の思想は、現代の合理主義に侵された新劇などから見ると、まさに正反対の思想と言えるかも知れません。また今回は舞台衣裳にも狂言装束を使用しました。自分の嫁を人買いに売る程の貧乏暮らしなので身形もみすぼらしくボロボロに、という観客の余計な先入観を排除するのが目的です。着る者の人格や生活環境を特定できる程のリアリティーを持たず、あくまでその人物の人物や大まかな身分のみを表現してくれる狂言装束によって、表現は一層明確なものになりました。

これまでの和製オペラといえば、日本語で歌っているのに言葉が聞き取れなかったり、演技を疎かにし曖昧な表現ばかりが目立ったりしていましたが、演劇的説得力と言葉の重要性を念頭に置いた今回のオペラ「人買太郎兵衛」は、狂言という古典演劇をつましく取り入れることで、新たな魅力と明確なメッセージ性を得ることができました。終演しても暫く鳴り止まなかつた観客

の拍手は、公演の完成度と、青木氏や他出演者達の舞台に対する真摯な態度へのものであり、まさしく正當なコラボレーションのひとつの成功例であると思えます。



金久蒼汲（かねひさ そうきゆう）

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二年、四年インドネシア公演旅行に参加。

## 足りないものー言語感覚ー

原 斗轟

この頃安東先生に稽古をつけて頂いていると、先生は「君達世代には日本語の言語感覚が無い」と仰います。言語感覚が無いとは一体どういうことなのか。安東先生は日本人としてのアイデンティティーや舞台に立つ者としての心構え、また人格の根幹となる強い芯の有無など数多くの問題提起をされ、その度に強く感銘を受けてきました。その中でもこの指摘は強烈で日本語を母語として今まで生きてきた自分を否定されたような衝撃を受けました。しかしショックを受けているだけでは前に進むことができませんので自分なりに分析をすることにしました。

舞台を学んでいた大学時代と大和座で過ごして来た1年間で振り返ると確かに言語感覚の有無を疑うようなことがありました。私が大学時代に受講した安東先生の授業では1年次では謡いを2年次では狂言を学びます。そこで初めて謡いと台詞を声に出して練習するのですが、謡は音程が定まらず拍がとれない、また狂言台詞に至っては日本語に思えません。当時は上手く出来ないので慣れていないから、古典だからと単純に思っていました。卒業後、古典に

多少慣れてきたものの初めて聞く謡や狂言にはまだ正しく反応できずにいます。やはり学生時代と同様に古典に対して自分で壁を作っているのかもしれない。

また外へ目を向けてみますと世間で注目されている事柄の多くは言語感覚の有無に繋がっているように思えます。例えばテレビのある音楽番組の中で若い歌手グループが明らかに年上の司会者の質問に友達と接するような言葉を使って返答していました。また最近世間を騒がせている某IT企業の社長が出版した著書の中で「僕は旧世代の人と話をして役に立ったことはひとつもありません」と書いています。この本の内容は金を儲けるための思考の方法として7万部以上も売れています。

決して彼らのやり方を否定している訳ではありませんが彼らにとって敬語・敬う気持ちといったものは煩わしい事で自分のためにはならない無駄なことなのでしょう。言語感覚とは論点が違うようにも思えますが根本には言語感覚の有無が潜んでいるように思います。発信する側と受け取る側双方に言語感覚が備わっているならば敬語を巡る混乱や先人を蔑ろにした本が売れることは無いはず。私自身、もし大和座で色々な方と関わりを持ち、言語感覚について考える場が無ければ、彼らと同じように人に対して魅力を感じない状態に陥ったの

ではないかと怖くなります。

安東先生は「型を体の中に放り込むことは勿論大切なことだがその基本の積み重ねが大切だ」と仰います。もし私自身に言語感覚というものが明確に存在していれば学生時代から数えて5年間の積み重ねが実を結んでいたのかもしれませんが。そう考えると愕然としてしまいますが今の自分から目を逸らすことは出来ません。今の自分から逃げてしまえば狂言を学ぶ意味は無いと思いません。今は精神論ばかりで要領を得ませんが今年には言語感覚を体の中に放り込み、狂言だけでなく人間としても成長することを目標にしたいと思えます。



原斗轟(はらとこうじ)

一九八一年福岡県久留米市生まれ。本名・原裕之。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。在学中に狂言と出会い多大な触発を受け、学外公演「狂言レビュー」において四回の狂言出演を果たす。卒業後も先輩(小田・金久)を習って関西に留まり、「大和座狂言事務所」への参入を決意。

## 大和座狂言事務所関連

### 催しのお知らせ

#### 五月

二日【月】午前二〇時三〇分

大阪聖母学院小学校狂言鑑賞会

「蟹山伏」「附子」「講話と演習」

(非公開)

七日【土】午前十一時 京都観世会館

浦田定期能 (忠三郎家関係)

「屋島」「飛越」「安達原」ほか

一般券/三五〇〇円

「お問合わせ」〇七五 七七一 六一一四

八日【日】午前十時 大槻能楽堂

佐野荒陵社春の会 (入場無料)

「お問合わせ」〇六 六七六一 八〇五五

十五日【日】午後二時三十分

狂言 やるまい会 名古屋公演

「通円」「鈍太郎」「骨皮」ほか

A席六五〇〇円/B席五〇〇〇円

「お問合わせ」〇九〇 四四〇二 八九九九

会場/名古屋能楽堂

#### 六月

四日【土】午後二時 富田林中央公民館

講話と演習 シリーズの

「能の意味を知りましょう」(要申込)

「お問合わせ」〇七二二 二四 三三三三

七日【火】午後一時 大槻能楽堂

市岡高等学校能楽鑑賞会(非公開)

「殺生石」「千鳥」

「お問合わせ」大和座狂言事務所

九日【木】午後一時 堺能楽会館

大浜中学校狂言鑑賞会(非公開)

「附子」「講話と演習」

「お問合わせ」大和座狂言事務所

十二日【日】午前十一時 京都観世会館

第三十三回《蘭の会》 有料

「景清」「棒縛」「江口」「善界」ほか

「お問合わせ」〇七五 七七一 六一一四

十四日【火】午後三時三十分

大津プリンスホテル

「ITC日本リージョン年次大会」

講演「現代生活に活かせる狂言」

十六日【木】午前十時 大槻能楽堂

関西大学第一高等学校狂言観賞会

「しびり」「講話と演習」「棒縛り」

「お問合わせ」大和座狂言事務所

十八日【土】午後二時 富田林中央公民館

講話と演習 シリーズの

「狂言の意味を知りましょう」（要申込）

「お問合わせ」〇七二二 二四 三三三三三

## 予告

六月二十八日【火】午後二時

「古典芸能と出会うひととき」その三十五

新シリーズ《日本語のちから》

「楽しい日本語」

狂言と落語で味わう「荒唐無稽

狂言「磁石」ほか

会場 千里中央「A&Hホール」

七月二十三日【土】午後六時半

富田林中央公民館主催シリーズ公演の

「狂言鑑賞の夕べ」（要申込）

「口真似」「講話と演習」「神鳴」

会場/重要文化財・旧杉山住宅

「お問合わせ」

中央公民館 〇七二二 二四 三三三三三

教育委員会 〇七二二 二五 一〇〇〇〇

## 編集後記

すべてが新たに始まる4月です。私たち大和座の若手も年々目標を高めながら切磋琢磨しております。その成長ぶりは大和座通信においても窺い知ることが出来ます。最初は主張したい事が定まらず戸惑いがちだった若手の原稿も、今では大分上達し、しっかりと考えをまとめられるようになってきました。また、大和座通信の編集をし

の場も大和座同様、人格形成に深く関わっていると思っております。自分が受けた諸先輩方のアドバイスや意見などを自分と同じように悩み、悶々としている学生に伝えていきたいと思っております。また大和座で受けた良い影響を、受け持つ学生達にも与えられるよう頑張るつもりです。大和座を見守って下さっているみなさま！これからも大和座の成長をどうぞご期待ください。

秀

ながら原稿が集まってみれば同じようなテーマで原稿が揃ったりします。これをみますと、座員一同がきちんと同じ方向を見据えながら前進していることがわかり大変うれしくなります。大和座は安東先生を柱に、経験豊かな諸先輩方の御指導の元、人格形成の塾としても私たちが貴重な場を与えてくれていきます。迷いの多い世代の若者達が互いに話し合いながら、また先輩方からアドバイスを受けながら前進していく姿は、見ていて気持ちの良いものです。私も身もこの大和座の中で成長してきた一人です。うれしいことに大和座との関係を作ってくれた母校、羽衣学園短期大学（現：羽衣国際大学）へこの四月から非常勤講師として出講することになりました。今度はメッセージを発する側になったわけです。教育

発行 日二〇〇五年四月十五日  
発行責任者 許 秀美

## 大和座狂言事務所

代表 安東伸元

千五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

06(6384)5016

fax 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza  
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp